# ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 モコットゥナシ　　絵　小笠原 小夜

## クイズ

道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。いくつ読めるかな。

①旭川市**近文**
②日高管内の**襟裳**
③小樽市**祝津**

＝答えは紙面の下に

## 読んでみよう

アイヌ語には、日本語にない音があります。これをカタカナで書くときには字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタㇻ」の「ㇻ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ロ」です。例えば「イコㇿ」（宝物）、「チポㇿ」（魚卵）、「ホロケウ」（オオカミ）という単語などに使われます。ロとルの中間のような音で、短く弱く発音すると良いでしょう。上の単語は、本によっては「チポル」のように書かれていることもありますが、どちらで書いても発音は同じです。

「ロ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学文学部教授の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。

### クイズの答え

①ちかぶみち（チカプニ）　（鳥）・ウㇱ（いる）・ナ（ところ）。鳥が多く生息するところ。
②ぺトル　エトルㇷ゚（みさき）。えりみ町にあります
③ルウンウㇺ（ルシュナ）・ウㇱ（あるところ）
地名の意味は「北海道の地名」「アイヌ語地名の研究」（山田秀三著、草風館）を参考にしています。

ミンタㇻのこれまでの紙面は、どうしん電子版「親子ページ　まなぶん」で読むことができます。今の「先人たちの物語」だけでなく、アイヌ文化をめぐる季節ごとの話題を解説する記事もありますよ。「まなぶん」でけんさくすると、このページにたどりつけます。ぜひ読んでみてください。

# 先人たちの物語　シンリッオルシペ

監修　佐々木 利和

## キリスト教広め　ウタリ思う心短歌に

## バチェラー八重子（1884～1962年）

バチェラー八重子は、もとの名を向井八重子といい、フチというアイヌ語名があったともいわれています。1884年（明治17年）、今の伊達市有珠町に生まれました。父は向井モコッチャロ（富蔵）、母はフッチセといいました。

そのころ、イギリス聖公会のジョン・バチェラーという宣教師が、アイヌ民族にキリスト教を広めるための活動をしていました。バチェラーはモコッチャロとも親しく、八重子もよくなつきました。そして、7歳のときに洗礼を受けて、キリスト教の信者になりました。

モコッチャロは仕事がうまくいき、裕福になりましたが、八重子が11歳のときに亡くなりました。そのころバチェラーは、身よりのないアイヌの子供を引き取り、札幌に建てた「アイヌ・ガールズ・スクール」で教育を受けさせていました。学びたいと思っていた八重子は、バチェラーを頼って教育を受け、やがて東京の香蘭聖書学校に進みました。

18歳になると、バチェラーの布教を手伝うようになり、22歳のときにバチェラー夫妻の養女になりました。1908年（明治41年）には、バチェラーとともにイギリスにわたり、カンタベリー大主教によって伝道師に任命されました。イギリスでは各地で演説をし、バチェラーの学園をより良くするために寄付をうったえました。

八重子は伝道のかたわら、アイヌ民族の苦境を短歌にしました。それらの歌には、差別や苦しい暮らしにあえぐ仲間を思う心があふれており、それが読む人の胸を打ちました。

もとより人に見せるつもりはありませんでしたが、周囲のすすめで「若きウタリに」という歌集にまとめることになりました。ウタリとは「同族」の意味で使われるアイヌ語です。

こうしてさまざまな活動をしながら、有珠の「バチラー夫妻記念教会堂」で、弟の向井山雄とともに晩年を過ごしました。教会堂のそばには、八重子の歌と生涯をきざんだ歌碑が立てられています。

（敬称略）

### 心身健全願い禁酒うったえ

「ずたずたに　踏みにじられし
ウタリの名、取り返すのも己が
胸にあり」

「石を割る　木さへある世ぞ
ウタリの子等　割りて進まむ
此の憂世をば」

「空にのみ　星ありとすな　人の世の　星を数へむ　良き子集めて」

「トレシ方　ちからのかぎり
学べかし　世に出て恥じぬ　道しるべの為」（トレシ＝トゥレシは、妹たち＝若い女性たち）

「ウタシパノ　ウコヤイカタヌ
ピリカプリ　忘るなウタリ
とこしへまでも」（おたがいに尊敬しあう　よい風習を　忘れるな　仲間たちよ　永遠に）

「アウタリヒ　モシリ　イコンヌプ　トノトネナ　イカエチクーナ　エチイホシキナ」（仲間たちよ　国を亡ぼす魔物は酒だ　決して飲むな　決して酔うな）

八重子の歌にはアイヌ語がよく使われます。また心身の健全を呼びかけ、教育によって生活を変えようとうったえる歌が多くあります。当時のアイヌ民族にとって飲酒が大きな問題となっていました。

世界各地で、貧しい暮らしをする人々が酒になぐさめを求めてしまうことが問題となっており、アイヌ民族も同じ状況にありました。八重子をはじめ、キリスト教を学んだ人々は特にこれを問題視し、禁酒をうったえる運動を起こしました。

八重子はクリスチャンでしたが、歌集の中にはアイヌの神もよく歌われています。強く生きたいと願いつつも、神に救いを求めたくなる、八重子の心のありようがよく伝わってきます。